

妄想の日々

永原 順子

Y 氏より突然、
「図書館水没！救援タノム！」
というメールが送られてきて、我々はがさがさと集まり、図書救出作業に参加したのであるが。

ふーん、警備員さんが異常を発見したのかー。

警備員さんが図書館の前を通りかかる。総人のいつもの階段から何やらひたひたと流れ出る水、水、水。

「！！！」凍り付いて走り去る警備員さんの後姿・・・

地下に人がいなくてよかったなあ（休日だからいるわけがない）。ん。ひょっとして何かのトリックでどこかに死体が！（縁起でもない）（誰かの作品を読みすぎだ）

もとい。ちょっと待て。地下から水が溢れてるってことはもう絶望的ではないのか？今さらなにをあげようというのだ！あああの本もあれももうだめだわー（ここまできても誤解に気付いていない）・・・

そんな妄想を抱えながら図書館の二階に上がると一面に広がる図書の数々。壁や窓には、あますところなく絵図の類が吊られている。

よかったー全滅ではなくてー。まず水没という言葉有谁が使ったのだ？いや比喩ととれなかったわたしの落度か・・・だいたい地下が水没するとしたらどれだけの水が・・・。

いかん。まずは作業に集中しよう。全滅（それは妄想です）は免れたとはいえ、これは忌々しき事態である。

完全に水没したような図書もあれば、「半」没したのか、めくるほどひどくなっていく（その逆も）図書もある。それらのページとページの間一枚一枚紙を

挟んでいくのである。

もっとハイテクになっているのかと思ったなあ。これじゃまるで、お茶をこぼした教科書や雨に濡れた辞書を、他にどこにもぶつけようのない怒りと虚脱感に苛まれながらやった作業と一緒にではないか。子供の頃、小学○年生などの「20××年の世界」で見て、「うわー未来ってすげえなあ」と思った携帯電話やテレビ電話ができた（それにしてもまだ中にエコな自動車が通っている透明なチューブができてないのは何故だ）が、こういう作業はかわらないのかあ。なんだか感動的だなあ・・・というか紙の本に対してはこのやり方が最適であり、ハイテクにしようにも出来ないだろう。するとすればロボットが挟むくらいか・・・あまり意味のないハイテクだなあ、いや、ハイテクってなんだ？・・・

いかんいかん集中せねば。

ある一冊の本にとりかかると、すぐに「袋とじ」にぶつかった。正確に言うと、製本の際にページのはしを切り落とし損ね、ページを開くことができない状態の箇所があった、となるか。それがページの一边ならまだよい。二辺のものがざらにあるのだ。一边のものはたいてい本の上側が切れていない。よって下からそーっとページを開きながら紙を入れていけばよい。しかし二辺、つまり上と横が切れていないと、紙を挟む（挟むというより滑り込ませる）ことが至難の業である。なんとか隙間を作るのだが相手はびっしょり濡れている。そしてそれが一箇所や二箇所の騒ぎではない。最初から最後までほとんどそんな状態で・・・

うわっ！あぶない・・・破りそうだった一。ふう。これは意図的（どんな意図だ？）なものか？それとも単に製本が雑なのか？いや、昔は技術がなくてやむを得ずこんな状態になったのだらうか。ひょっとして本というものは、かつてペーパーナイフを片手に読むのが当たり前だったのかもしれない。新しい書物を読む喜びを、そしてその書物を最初に開けているのは他ならぬ自分なのだという満足感を、ページを破るたびにかみしめながら昔の人は・・・うーん、感動的だなあ・・・ということは、これはまだ誰も借りてないすなわち読んでない図書なのか！？今（水没して）このわたし

が開けなければこの図書は永遠に閉ざされたままだったかもしれぬ・・・
ああ感動的だ・・・

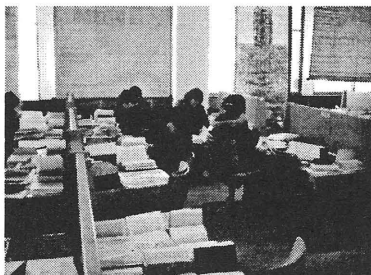
「ちょっと一手えとまってるでー」
いかんいかん。ほんまにいかん。

.....

以上、ささやかながら（ほんとにささやかである）図書救出のお手伝いをさせていただき、いつもとは違う角度から本というものに接することができた。たいへんなご苦勞をなさった職員の皆さんから怒られるかもしれないが、あえて申し上げると、皮肉でも変な意味でもなく、真っ直ぐな気持ちで「貴重な体験」だったと思う。物理的にも精神的にも・・・いろんな意味で「本の世界」に漬かりきった時間であった。

（ながはら じゅんこ，人間・環境学研究科総合人間学部図書館分室）

Photo Album 4



大閲覧室での吸水作業
黙々と濡れた資料に吸水紙をはさむ作業が続けられた